

Ⅲ 飛鳥地域の調査

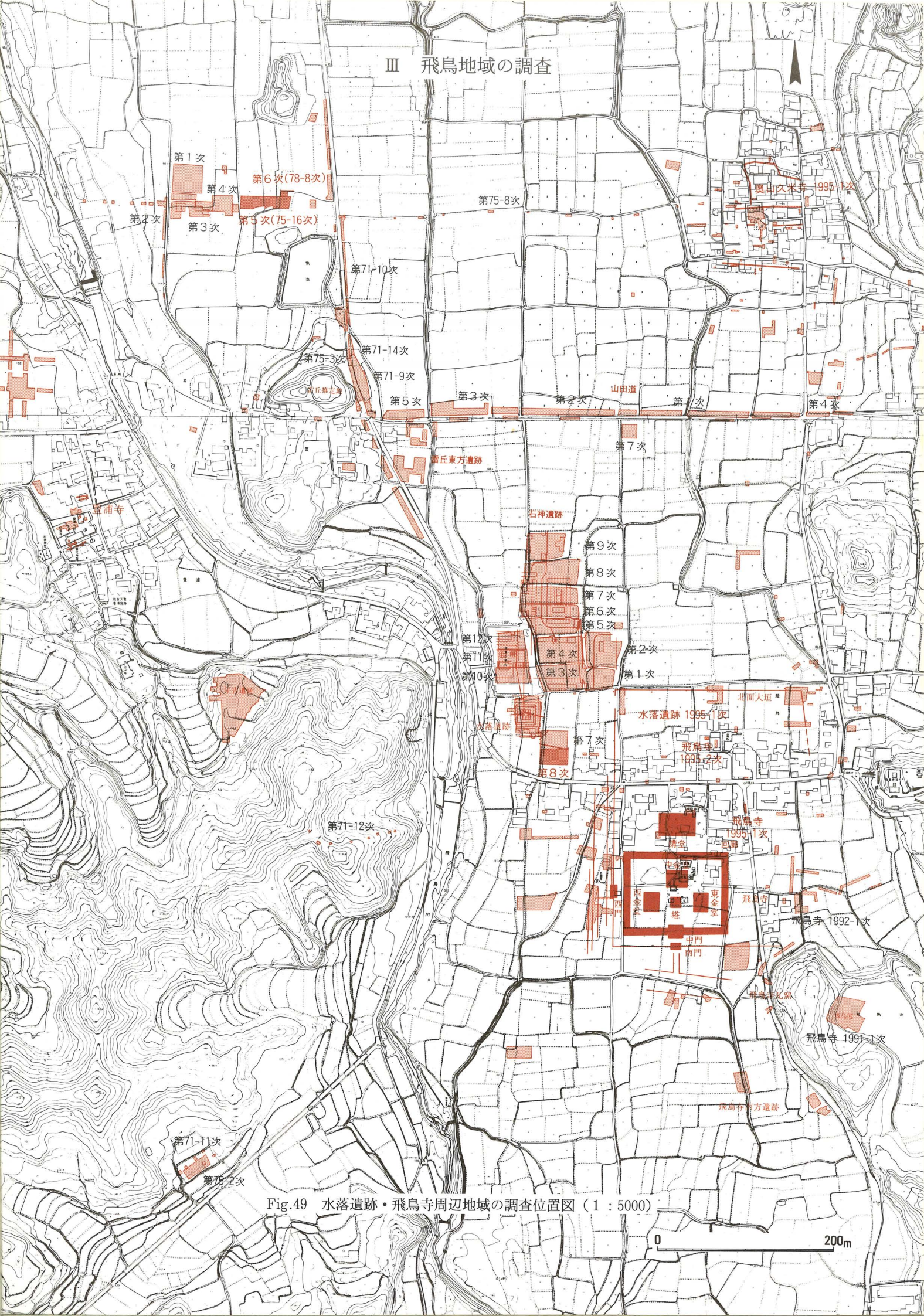


Fig.49 水落遺跡・飛鳥寺周辺地域の調査位置図（1：5000）

1 水落遺跡第8次調査

(1995年7月～10月)

水落・石神両遺跡のこれまでの調査によって、史跡指定の漏刻台及び周囲の関連遺構は飛鳥寺西方地区の西北隅に占地することが分っている。しかし、水落遺跡については、漏刻台と周囲の関連遺構（以下、中心区画と呼ぶ）のみが解明されているにすぎず、中心区画と関連する施設や遺跡の範囲、飛鳥寺西方の遺跡との関係についてはほとんど知られていなかった。こうした状況を踏まえ、当調査部では水落遺跡の範囲と構造、飛鳥寺西方に広がる遺跡の構造と水落遺跡との関係を解明すべく、史跡指定地周辺部の調査を進めることになった。そして、1994年から3ヶ年の計画で史跡指定地の東南部の南北に長い一枚の水田（面積約1900㎡）を調査対象とし、北側から調査に着手した。2年目に当る第8次調査は、前年度の第7次調査区の南側部分、約510㎡を対象に実施した。

前年の第7次調査区には、中心区画の東南隅部がかかり、以下に述べるような中心区画に関する新たな知見、中心区画周辺に関する情報をえた。

- ① まず中心区画について。水時計を格納する礎石建物、周囲の溝と建物、そしてこれら全体をカバーする掘込地業が、正方形を基準とする設計企画で造営されていること。東・北・西の岸には四隅に角楼をもつ廊状建物が配され、南には柱筋を揃えて独立した東西棟建物が建ち、全体としては中心建物を囲う配置構造をとること。
- ② 従前、水落遺跡の南限の塀と見られていた東西方向の柱穴列（S A 295）は、塀ではなく、時期の異なる建物であること。また、南限・東限に関する遺構は検出されず、遺跡は更に調査区外に広がること。
- ③ 調査区内は、水時計に水を供給すると推測される大規模な石組斜行溝 S D 3410や木樋暗渠 S D 3370等の水路があるが、中心区画と関連する建物はなく、石敷広場になっていること。

層序と地勢

調査区の基本的な層序は、耕作土・二枚の床土・灰褐色砂質土・暗灰褐色粘質土・炭混り暗灰色粘質土・暗灰色～黄褐色砂質土・灰褐色砂礫層の順であり、第7次調査とかわりない。炭混り暗灰色粘質土は平安時代の遺物包含層であり、7世紀の遺構は、その下の旧河川敷堆積である暗灰色～黄褐色砂質土面で検出した。7世紀代の遺構面は東と南が高く、北西に向って下降する。平安時代の開発で大きく削平され、当初の面をとどめる所は少ないが、比較的残りのよい調査区北辺部では、約1度の傾斜をもつ。

遺 構

検出した遺構には、7世紀代に属する石敷・石列・石組溝・木樋暗渠・池状遺構、平安時代の掘立柱塀・大小の土坑・素掘り溝、中世以降の耕作にともなう多数の素掘り溝等がある。

7世紀の遺構 平安時代の土坑や攪乱削平部分を除く、調査区のほぼ全面に石敷痕跡とみられる不整形な小さいくぼみが確認され、本来は全面石敷であったと考えられる。S X 3492は、そのなごりで第7次調査区南東部の石敷と一連のものとみられる。S X 3492の近辺にある石列 S X 3495は、比較的大きな石材を一段、ないし二段積み上げ、西の石敷きとは段差を設けており、低い雛段状の石敷であった可能性を示唆する。北で東に偏する方位をもち、第7次調査検出の

木樋暗渠 S D 3370 の上に残る石列の延長であるが、北側で検出の石列 S X 3390 とは方位を異にし、石敷・石列にも時期差が認められるようである。

調査区東南部にある石敷列 S X 3485 は、後述する石組斜行溝 S D 3490 の南に設けられた石敷帯 S X 3489 と直行する方位で、石列 S X 3495 の方位と一致する。S X 3489 より大きく平坦面をもつ石材を用い、S X 3489 に喰い込む形で設置されているが、基盤となる黄褐色砂質土面に直接据えられている。一方、S X 3489 は薄い整地を行った上に敷かれており、両者は同時併存するが仕事は前者が先である。残存長 1.4m ・幅約 0.5m、S X 3495 との間隔約 3 m。

石組斜行溝 S D 3490 は調査区北辺を東南東から西北西に向って流れ、西で北に約 5 度偏する方位をもつ。南側に幅約 0.8m の玉石の石敷帯 S X 3489 をともなう。両側に巨大な花崗岩を立て、底には東半部では拳大から人頭大の礫を乱雑に、西半部では比較的丁寧にバラスを敷く。溝幅は内法で約 0.6m、南側の石敷帯 S X 3489 の上面からの深さは 0.1～0.2m。

S D 3490 を壊す土坑の断面や断割調査の結果、底石は後の改修時に敷設されたものと判明した。当初の溝は幅約 1.3m ・深さ約 0.3m の掘形を掘り、更に側石を据えるため両側を使用石材の大きさに応じて掘りくぼめている。当初の素掘り底の面には薄く砂が堆積するが、改修時にその上に暗茶褐色砂質土で約 20cm 程かさ上げを行い、その上に礫やバラスを敷いている。底石の透き間、それを覆う堆積土（暗灰褐粘質土層）には 10 世紀中頃の土器類が含まれ、また、かさ上げ土からも 1 点ではあるが 9 世紀代とみられる黒色土器の杯 B 小片が出土しており、溝の改修時期は 9 世紀と考えられる。

S D 3490 の南側に付設された石敷帯 S X 3489 は南側に見切りをもつ。建物の雨落溝と犬走りの可能性を考え周囲を精査したが、これにともなう掘立柱建物・塀は検出していない。周囲の石敷がほとんど抜かれているのにこれだけが遺存するのは極めて不自然であり、この仕事も石組斜行溝の改修と同時にこなわれた可能性が高い。

調査区東北隅の木樋暗渠 S D 3370 は、第 7 次調査の検出の延長部で、木樋抜取穴が掘形と重複するが、上幅が約 1.2m、下幅が 0.5m ・深さ 0.8m の逆台形状の掘形をもつ。抜取穴からは、平安時代の土器、瓦片が出土している。木樋は、据付痕跡から幅 0.4m 程の材とみられ、掘形底面に約 15cm のかさ上げた土の上に設置されていた。木樋の台石 1 個を検出したが、第 7 次調査検出の最寄りの台石との間隔は 2.2m。

第 7 次調査検出の南北石組溝 S D 3400 は、7 世紀代では最も古い遺構であるが、第 8 次調査区では後の遺構の造営や削平のため極めて残りが悪く、掘形、側石抜き取り痕跡を部分的に検出したにすぎない。

調査区西南部の石組溝 S D 3560 は、側に 2 段に石を積み、内法幅 1.2m ・深さ 0.1m。石組溝の延長部は平安時代の土坑で破壊され方位は定かでないが、後述する池状遺構 S G 3480 の西岸辺に側石据付痕らしき 2 条の溝を検出しており、これにつながるものと考えている。今の所、S G 3480 の排水路とみておく。

池状遺構 S G 3480 は、調査区東南部に自然石を弧状に配した石列 12 個を長さ約 3 m にわたって検出した。石列は南側に面をそろえ、この石列の南 1.7m から始まる浅い掘り込みがあり、更に南へと広がり、両者一体で池と考えている。弧状石列は旧河川堆積を約 15cm 掘り下げ、掘形よりやや内側に石を据え、北側背面に炭粒まじりの灰褐色砂質土を入れて固定し、更にその

上に薄く整地をおこなっているため掘形は見えない。石列の南側の一回り大きい掘り込みの北岸にある礫石は人工的配石ではなく、旧河川堆積の礫層に由来する。埋め土は小礫を混える茶褐色砂質土で飛鳥寺創建軒丸瓦片1点が出土した。この池状遺構の西端付近には巨石を落し込んだ土坑2基（SK 3512・3513）がある。石はこの池に使用されていた可能性が高い。



Fig.50 水落遺跡第8次調査遺構図（1：200）

平安時代の遺構 素掘り溝・大小の土坑・掘立柱塀等がある。東辺の南北素掘り溝 S D 3360、中央西寄りの南北素掘り溝 S D 3420は、いずれも第7次調査で検出しており、その南延長部にあたる。S D 3360は幅0.6m・深さ5cm、石組斜行溝 S D 3490との交差部分では側石の上面を削って流路を確保する。S D 3420は幅1.0m・深さ5cmで、S D 3490との交差部では側石1～2石を抜き取って流路を確保するが、石敷帯 S X 3489は底石として生かしているようである。

溝としてはこの他、南北斜行細溝（S D 3525・3505・3515・3544・3564）を検出した。溝底はいずれも凹凸した面をなし、埋め土には黒色土器をはじめとする平安時代の土器片を含む。方位は、前述の7世紀の石列 S X 3495・石敷列 S X 3485と一致し、ほぼ3mの間隔で掘られていて、S X 3495・S X 3485などの石列・石敷列を抜き取った溝の可能性はある。

石組斜行溝 S D 3490の北に団子状に並ぶ土坑 S K 3518・3519・3530・3540・3546・3550・3570・3571は、側石を抜き取るために掘られたもので、大量の礫を含む。南西辺の不整形土坑 S K 3520・3563・3573は、炭を大量に含む埋め土で平安時代中期の土器、瓦、礫を含む。前述の南北素掘り溝 S D 3420・南北斜行細溝 S D 3544を壊し、それより新しいが、次に述べる塀 S A 3555・建物 S B 3565より古く、柱掘形は埋め土を掘り込んでいる。

調査区中央東寄り石組斜行溝 S D 3490の南岸にある小土坑 S K 3510は径0.5m程の円形の掘形で、中には次に述べるような状態で土器が一括埋納されていた。底に須恵器の甕腹片を敷き、その上に丹波篠窯産の須恵器の鉢を正位の状態で据え、中に土師器小皿8枚以上、杯3点、鐏釜片、黒色土器A類の大小の碗各2点を納め、それらの上に石を2個置いていた。土師器の杯・皿、黒色土器の碗は、完形品であるが、須恵器の鉢はもともと体部の一部を欠損したものを使っている。出土土器類は、天禄四（973）年焼亡した薬師寺西僧房の床面に残されていた土器類（『薬師寺発掘調査報告』pp.149～155、pp.256～267）と共通する。

調査区西南部には掘立柱建物 S B 3565と南北塀 S A 3555を検出した。S B 3565は、柱間寸法が2.1m（7尺）等間で2間分を検出したが、棟方向は不明である。建物とみたが、次に述べる S A 3555の南端の柱穴と柱筋が揃い一体の塀の可能性もある。S A 3555は柱間が不揃いで、1.8～3.0m。4間分を検出したが、石組斜行溝 S D 3490の北には延びない。いずれの掘形にも平安中期の土器類を含み、平安時代の遺構のうちでは最も新しい遺構である。

中世以降の遺構 灰褐色砂質土面とその下層の暗灰褐色粘質土面の2面で中世の素掘り溝を多数検出した。現水田の南北畔の方向と一致する南北溝が多く、東西方向の溝はごく少ない。

遺物

土器、瓦、金属製品、銭貨、石製品等がある。土器類が多く、弥生土器や古墳時代の土器も出土しているが、本来、基盤の旧河川堆積層に含まれていたものであり、後の遺構掘削時にそこから遊離したものである。池 S G 3480や土坑の底に現われた旧河川堆積（砂礫層）に含まれる土器類は6世紀後半代の時期である。おそらく、遺跡の性格の違いを反映してか、7世紀代の土器類は北に隣接する石神遺跡では大量に出土しているが、水落遺跡側では極めて少量しか出土していない。土器の大半は、再びこの地を開発の手が入った平安時代のものであり、9世紀後半代から10世紀後半代に属す（Fig.51）。土師器の食器・煮沸具が多く、黒色土器A・B類（碗）、須恵器（鉢・甕）、灰釉陶器（碗・皿）、緑釉陶器（碗・皿）、輸入磁器（青磁）も少量出土している。軒瓦は、創建期軒丸瓦1点と7世紀後半の軒丸瓦XIV型式1点がある。丸・

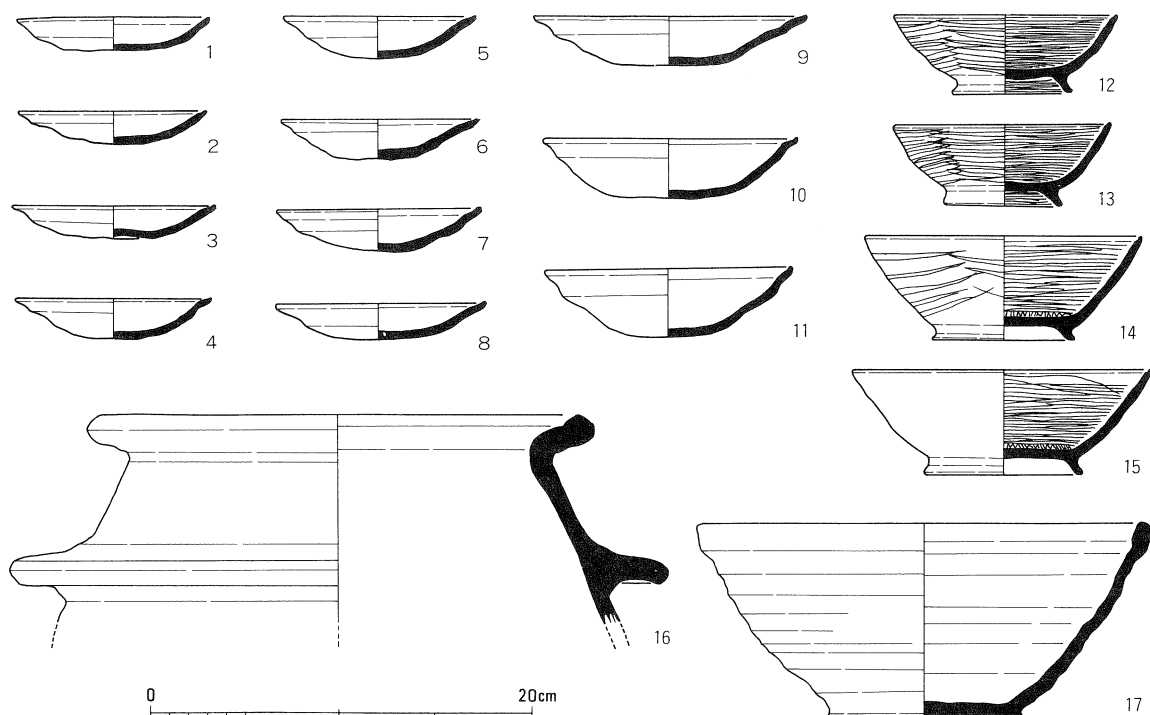


Fig.51 水落遺跡土坑S K3510出土土器（1：4）

平瓦は、丸瓦が300点(24kg)、平瓦が1,777点(68.8kg)出土した。量的には平瓦が丸瓦をしのぐ。丸・平瓦は奈良時代以降のものが多く、また二次的に火を受けたものが多い。

金属製品には、鉄鏃、鉄釘、不明鉄製品がある。鉄釘は比較的量が多いが、平安時代以降のものである。銭貨は、床土から寛永通寶2枚、暗灰褐色粘質土から延喜通寶1枚が出土した。

石器には剥片刃器1点が旧河川堆積から出土した。他に剥片も少量出土している。

まとめ

今回の調査でも、水落遺跡の南及び東を画す施設は検出されず、遺跡は更に南と東に広がることが明らかになった。一方、新たに石組斜行溝S D 3490、池状遺構S G 3480、およびS G 3480の余水を流す石組溝S D 3560を検出した。二本の溝は、水落遺跡中心区画よりも古い南北石組溝S D 3400（石神遺跡A－3期併行期）を壊して造られており、中心区画と同時期もしくはそれ以降の時期の所産と考えられる。また第7次調査でも中心区画と同時期と考えられる石組斜行溝S D 3410・木樋暗渠S D 3370を検出しているが、今回検出した溝と方位を異にし、調査区外でお互いに重複する関係にある。前述の遺構には年代決定できる遺物が乏しく、これらの遺構の先後関係は今後の調査にゆだねねばならない。池状遺構S G 3480も調査区の南に広がり、その性格付けについては次年度の調査を待たねばならないが、以下に記す、『日本書紀』にみえる須彌山の造営に係る施設の可能性があるため注目される。

＜飛鳥寺西方広場における須彌山関連記事＞

齐明天皇三年（657）七月辛丑
齐明天皇五年（659）三月甲午
齐明天皇六年（660）五月

飛鳥寺西に須彌山像を作り、旦に盂蘭盆会を行ない、暮に観貨邏人を饗す。
甘樫丘東の川上に須彌山を造り、陸奥と越の蝦夷を饗す。
中大兄皇子が初めて漏刻を造る。また、石上池辺に須彌山を作り、肅慎47人を饗す。

2 飛鳥寺の調査

A 1995-1 次調査

(1995年 7 月)

この調査は住宅改築にともなう事前調査としておこなった。調査地は、飛鳥寺講堂の東北約 50m の地点で、調査面積は 21m² である。

調査区の層序は、上から表土・褐色砂質土・灰色粘質土・褐色粘質土で、地表下約 1 m の深さで河川堆積層の礫層を確認した。遺構は主に、地表下約 0.6m の灰色粘質土層の上面で検出した。土坑 3 基などがある。

土坑 S K 900 は径約 0.7m、近世の土坑に大半を壊されわずかに底部を残すだけであった。土坑 S K 901 は径約 1 m あり、S K 900 と同じ暗灰色粘質土を埋め土とする。7 世紀代の土器を含む。この 2 つの穴は互いによく似ており、一連の建物あるいは塀の柱穴になる可能性も考えられるが、調査区の制約もあって追求できなかった。土坑 S K 902 は径約 0.6m の穴である。遺物は出土しなかった。

遺物は、土器・土製品、瓦類がある。瓦は、丸・平瓦（総計約 400 点・59kg）のほか、飛鳥寺Ⅲ型式の軒丸瓦が 3 点出土した。土製品には土錘形土製品がある。

遺構検出面の灰色粘質土層は、黄灰色微砂（花崗岩風化土）が混じるので、整地土層と考えられる。灰色粘質土は中世の遺物を含まないが、これが 7 世紀まで遡る整地土層であるかの判断は、今後の周辺の調査を待ちたい。

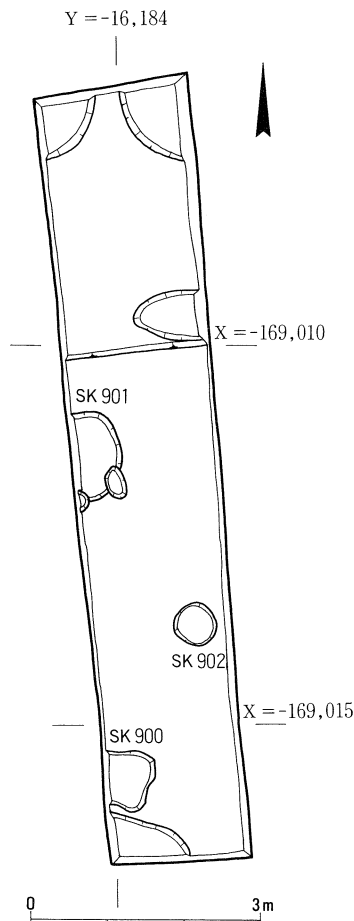


Fig. 52 飛鳥寺1995-1次調査遺構図 (1 : 100)

B 1995-2 次調査

(1995年 7 月)

この調査も住宅改築にともなう事前調査としておこなった。調査地は、飛鳥寺講堂の北方約 90m の地点で、調査面積は 10m² である。

東西溝 S D 910 を検出した。S D 910 は溝底で幅約 1.5m あり、北岸に護岸列石 S X 911・S X 912 がある。溝内の堆積土から、羽釜・スリ鉢が出土した。溝を覆う灰色粘土層から室町時代後期（16 世紀）の瓦質土器が出土したので、その頃には埋没したのであろう。

瓦は、丸・平瓦（総計約 300 点・33.6kg）のほか、飛鳥寺Ⅲ型式とⅣ型式の軒丸瓦が各々 1 点ずつ出土した。

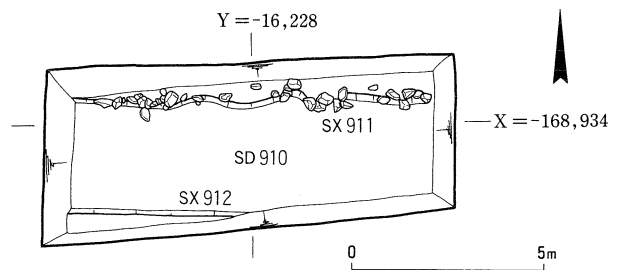


Fig. 53 飛鳥寺1995-2次調査遺構図 (1 : 200)

3 奥山久米寺の調査 (1995-1次)

(1995年9月～11月)

この調査は、明日香村奥山集落内での公共下水道本管埋設にともなう事前調査である。

奥山久米寺(奥山廃寺)についてはこれまでに、塔(1987年『概報18』)、金堂(1987年『概報18』、1989年『概報20』)、西面回廊(1973・74年『概報3』、1992年『概報24』)などが調査され、その結果、7世紀前半に造営された四天王寺式伽藍配置の古代寺院であることが推測できるに至っている。今回の調査は幅の狭いトレンチ調査ではあるが、調査が奥山久米寺跡の中心伽藍各所に及ぶため、これまで明らかでなかった、講堂や東面回廊などについての成果が期待された。調査総面積は298㎡である。

遺 構

I・II区 金堂跡北側の南北方向の調査区(I区)と東西方向の調査区(II区)である。

I・II区の交点付近を中心として、金堂の掘り込み地業を検出し、地業の北・東・西の端を確認した。金堂掘り込み地業は古墳時代の包含層である褐色土から掘り込まれており、1989-1次調査の成果と合わせると、その規模は、東西22.9m・南北19.1mである。版築層は残りの良い所で厚さ70cm残っていた。版築は厚さ8cmほどの層を12層識別できたが、これらは3層に大別できる。明橙色系土を地業底に置くことなどは前回の調査成果とも一致し、かなり丁寧な仕事である。版築層には土器小片を含むが、時期のわかるものはなかった。

1989-1次調査で発掘した金堂基壇の基盤高と比較すると、II区の東では基壇土が残っている部分もある。しかし、基壇外装や基壇周囲の化粧は全く残っていなかった。

I区ではほかに、金堂地業と同様に褐色土から掘り込む東西溝SD325、中世以降の土坑SK326・328・329がある。SD325は、幅0.4m・深さ0.2mの素掘り溝で、7世紀代の土器と瓦が出土した。SX327は抜き取り穴をもつ柱穴である。柱穴の直径0.8m、検出面からの深さは0.7mである。抜き取り穴から7世紀代の土器が出土した。



Fig.54 奥山久米寺1995-1次調査位置図および四天王寺(左)・山田寺(右)との比較図(1:2000)

土坑 S K 326は径 4 m 以上の土坑。中世の遺物を含み、瓦片や礫が大量に出土した。

Ⅱ区では、掘り込み地業以外には、中世の土坑 S K 330や近世の土坑 S K 331・332あるいは土坑群 S X 333などを検出したにとどまった。東面・西面の回廊の想定位置を横断するが、回廊は近世以降の削平によって失われ、検出できなかった。

Ⅲ区

塔跡の東方に設定した東西に長い調査区である。調査区西端に池状遺構 S X 335がある。東肩の一部を確認しただけで、全体の形や大きさは明らかでない。底面は、西に向かって緩く下がり、最も低い部分で深さ約 1 m ある。底面には拳大から人頭大の礫が敷かれ、その上に多量の瓦片や黒色土器を含む堆積層がある。黒色土器の年代からみて、平安時代初め（9世紀）に埋没したようだ。この他、近世以降の土坑や溝を検出した。

Ⅳ区

東面回廊北端推定地から講堂推定地の北側にかけての調査区である。東面回廊と北面東回廊推定地は近世以降の土坑や削平のため、その痕跡は見いだせなかったが、講堂推定地に隣接して講堂所用礎石をみつけた。

礎石落とし込み穴 S X 341は、講堂推定地の北東隅に位置する。東西 1.7m・南北 1.6m 以上ある南北に長い楕円形の穴で、検出面からの深さは約 1 m である。花崗岩製の礎石 2 個が落とし込まれていた。南側の礎石（礎石 A）は、柱座を上に向け、東に傾斜して出土した。北側で出土した礎石（礎石 B）は、柱座を下にして埋まっていた。礎石 B は、その大半が調査区外にあるため、引き上げられなかった。礎石 A より小型である。

この他、調査区の各所で中世以降の溝や土坑を検出した。講堂に直接関わる遺構はみつからず、調査区内では後世に攪乱破壊されたのであろう。また、調査区の西端では、古墳時代の包含層・暗黄褐灰色土を切り込む土坑を検出した。埋め土には瓦を含まない。飛鳥Ⅰ～Ⅱの土師器と須恵器が出土した。土坑と暗黄褐灰色土の上には暗褐色土混じり黄色砂質土がのる。この層は、講堂の基壇や整地に関わると思われたが、限られた調査区では確定できなかった。北面西回廊の痕跡も確認できなかった。

Ⅴ区

南面回廊・中門推定地の南側の調査区である。遺構は主に寺造営の際の整地土である黄褐色土混じり茶褐色土ないし茶褐色粘土の上面で検出した。調査区の東側約 45m 分では、地山または弥生時代包含層の上に整地土がのるのに対し、それから西方では、地山と整地土との間に飛鳥Ⅰの土器を含む包含層がある。遺構は、主に整地土上面で検出した。

調査区の東部ではほぼ方位にのる東西溝を、西端でやはり方位にのった南から北に向かって落ちる段差を検出した。また、中門推定値のほぼ正面で、径 1.5m ほどの大型の柱穴を検出した。深さ 0.6m 以上、幢竿などの柱穴であろうか。

土坑 S K 360は、東西 2.3m・南北 0.6m 以上・深さ 0.3m の土坑。埋め土は上下 2 層あり、下層の暗褐色砂質土層には、多量の炭とともに焼土・銅滓・鋳型片などが含まれる。土坑の底面には、火熱を受けて紫色に変色した粘土が残っていた。上層の黄白茶色粘土は、埋め立ての土であろう。

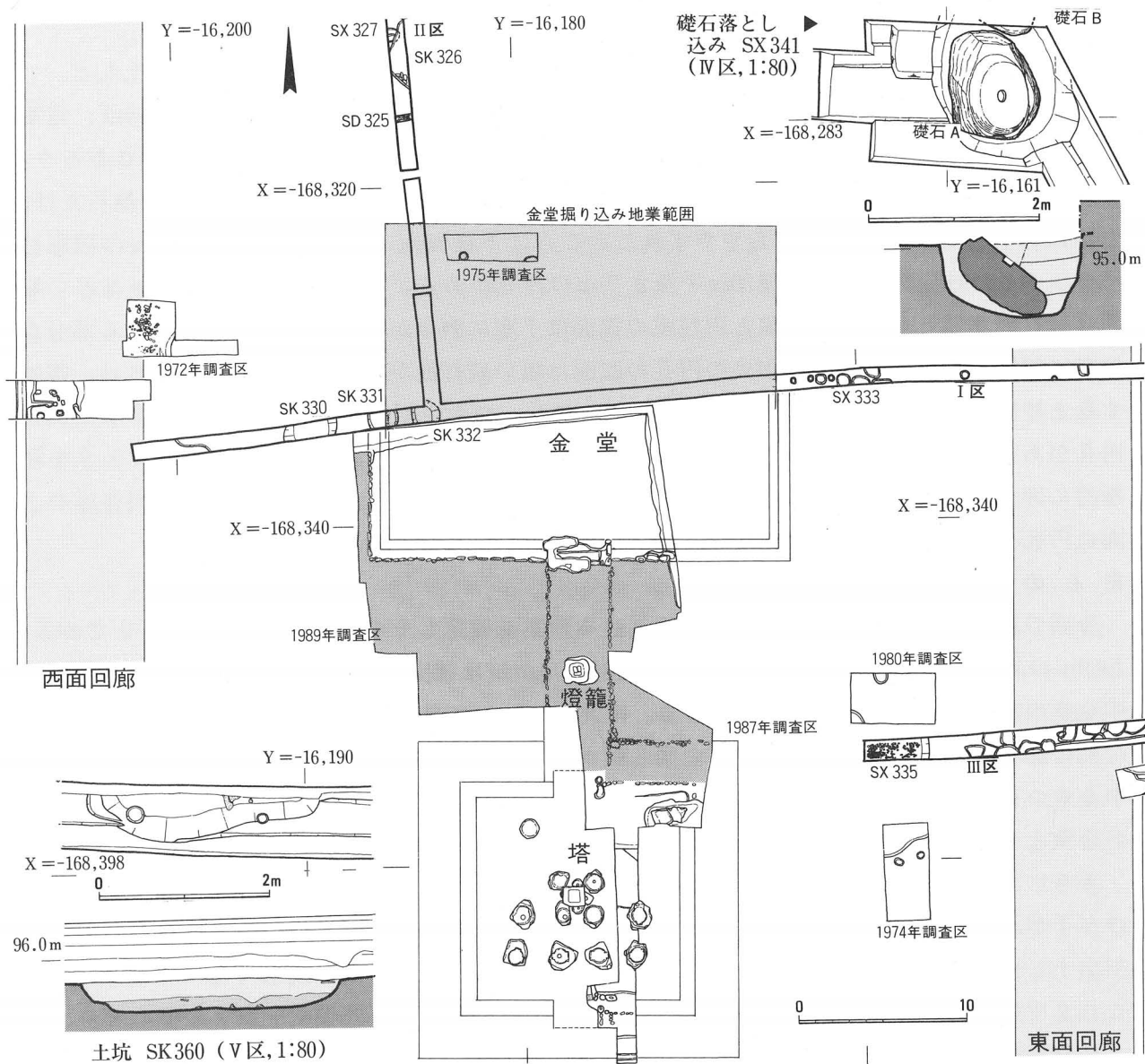


Fig.55 奥山久米寺1995-1次調査遺構図 (1 : 400)

遺物

瓦は、丸瓦が1332点 (173kg)、平瓦が4479点 (467kg) 出土。V区から、完形に近い竹状模骨丸瓦が出土した (Fig.56)。全長39.1cm・広端復原径17cm・狭端径11.5cm。凹面に2条の紐の圧痕がある。軒瓦は、軒丸瓦9点と軒平瓦6点がある。内訳は、軒丸瓦はⅡ4点 (C1点・D1点)・ⅣC1点・ⅧA1点・X2点 (C1点)、軒平瓦はⅠ・ⅡB・ⅢBが各1点であ

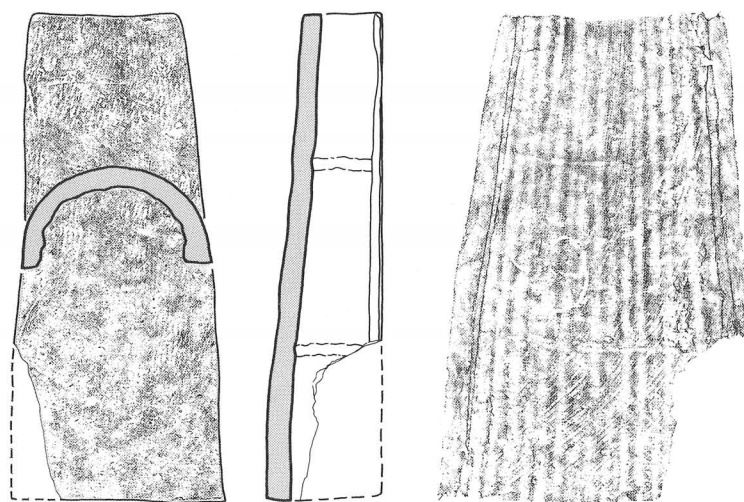


Fig.56 竹状模骨丸瓦 (1 : 6)

る（型式番号は『概報18・20』参照）。

土器は、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器・染付などが出土した。

土製品には、鋳型と埴塼がある。V区の土坑SK360出土。鋳型は大小の破片が178点、埴塼は破片8点がある。銅塊や銅滓をとまなっているの、銅製品の鋳造に関連するのであろう。

花崗岩製礎石がIV区SX341から2点出土し、うち1点（礎石A）を取り上げた。礎石Aは、直径1.2m、厚さ0.5m、中心からややずれたところに下径96cm・上径78cm・高さ12cmの円形柱座をつくる。柱座の中央には径20cm・深さ7cmの円孔がある。柱座の上面の直径60cmほどの範囲は敲打痕が残るが、その外側と円柱座の側面は丁寧に磨きが施される。敲打痕の残る部分が柱径に対応するのであろう。中央の円孔の底面は粗い敲打痕がそのまま残る。礎石Bは、復原すると柱座の下径80cm・上径66cm・高さ8cmとなり、やや小型である。やはり柱座の中央には円孔がある。円孔の直径18cm・深さ11cmで、礎石Aと大きな違いはない。円柱座の大きさを積極的に評価すれば、礎石Aは身舎用、礎石Bは庇用とみることもできよう。なお、円柱座の上面に円孔を穿つ礎石の類例は、川原寺推定西金堂礎石や法隆寺食堂礎石がある。

ま と め

今回の調査の最大の成果は、金堂の掘り込み地業を確認しその規模を確定できたことである。1989年の調査で金堂基壇の東西幅は23.4m（80尺）がほぼ確実となった。この規模は、川原寺中金堂の基壇推定東西幅24mに匹敵する。南北幅については約18m（60尺）と推定していたが、今回の調査によって、掘り込み地業の南北幅が19.1mと判明したので、基壇の南北幅も川原寺中金堂の19.2m（64尺）とほとんど同じと推定してよいだろう。これによって、飛鳥時代寺院の金堂としては、第一級の規模をもつことが再度確認できた。

さらに、講堂推定地に隣接して、礎石を発見した。これまで、講堂については地割り痕跡だけが手がかりだったが、この推定をはじめて裏付けることができた。周辺の民家の石垣には今回出土したものと同様の礎石断片があること、IV区から北は地形が一段低くなることから、これまでの推定通り第IV調査区の南側に講堂を想定し、四天王寺式伽藍配置とみることは、さらに妥当性を増したであろう（Fig.54）。

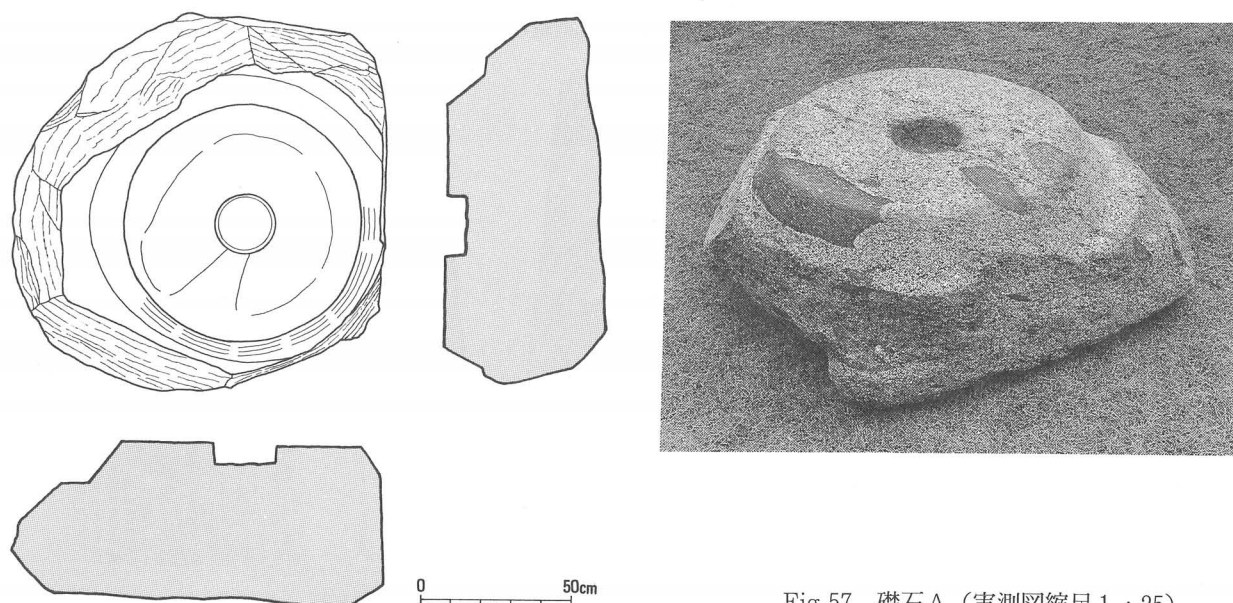


Fig.57 礎石A（実測図縮尺1：25）

4 坂田寺の調査 (1995-1次調査)

(1995年11月～12月)

本調査は、明日香村祝戸地区の下水道敷設にともなう事前調査として実施した。調査地は、建設省国営公園の建設にともなう第1次・第2次調査区(『概報3・5』)の中間である。現在の道路敷中央を、1～1.3m幅で長さ約45mにわたって調査した。調査面積は58㎡である。

坂田寺は、『扶桑略記』によれば、継体十六(522)年に渡来した司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来するといひ(欽明十三(552)年十月十三日条)、また『日本書紀』用明天皇二(587)年四月二日条に、鞍部多須奈が丈六像と寺を発願した記事、推古十四(606)年五月五日条には、鞍作鳥が金剛寺(坂田尼寺)を作る記事がある。出土瓦からも坂田寺が7世紀の初期には造営されたことは推測できるが、創建の伽藍は未発見である。これまでに判明しているのは、西面する奈良時代の礎石建ち仏堂と回廊(『概報11・21・22』)である。回廊は南面回廊と東面回廊の一部が発掘され、一辺58mほどの正方形に巡ることが推定されている。その場合、第2次調査南区(『概報5』)で検出した東西方向の石垣SX120は北面回廊の外側、仏堂と回廊がのる平坦面北側の石垣と推測され、また、第8次調査(『概報23』)で検出した南北方向の石垣SX223は、この平坦面西側の石垣と考えられる。今回の調査区は、これらの調査区に隣接し、関連する遺構の発見が予想された。

遺 構

検出した主要な遺構は、石垣SX120および、これと平行する東西方向の石垣SX230・SX231、石列SX232である。

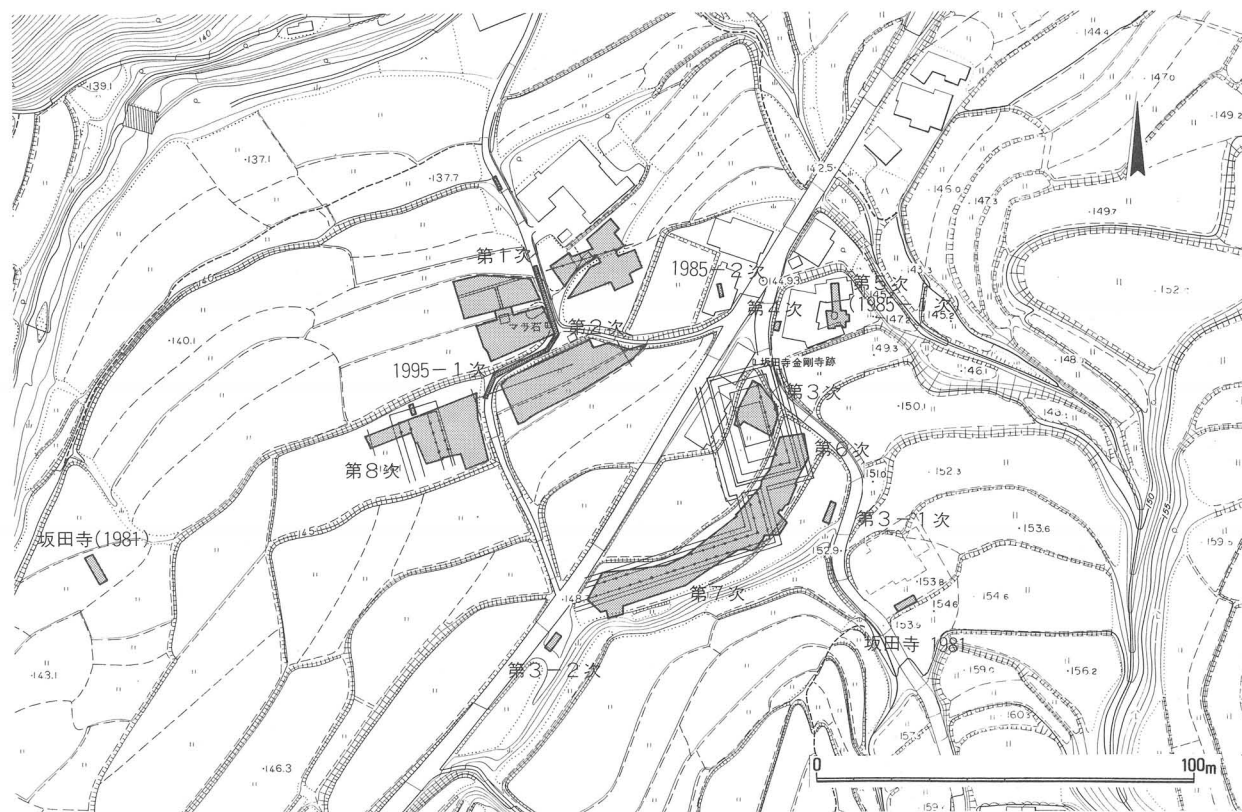


Fig.58 坂田寺調査位置図(1:1500)

石垣 S X 120 は、第 2 次調査南区で検出したものの西延長部を一部検出した。人頭大から一抱えほどある花崗岩玉石を積み上げる。

石垣 S X 230 は、長さ 1 m 以上の花崗岩巨石を並べた石垣である。5 石を確認したが、どれもほぼ直方体に近い形である。S X 230 の西は調査区外となり、また、東は後世の土坑 S K 236 によって壊されていた。東には同様の巨石を並べる石垣 S X 231 があるが、S X 231 は S X 230 の東延長線よりは北に張り出すことと、西端の石が南北方向に使われていることからすると、S X 230 は S X 231 の西まで直線的に延びてきて、そこから鍵形につながるものと推測する。S X 231 も東を土坑 S K 238 に壊される。

石列 S X 232 は、S X 120 の北 1.5 m ほどのところにある。径 50 cm ほどの花崗岩自然石を並べ、南側に面を揃えるので、S X 120 北側の石組み溝側石の可能性はある。

調査区北部では、花崗岩風化土の整地土層を確認したが、その上面では顕著な遺構を検出できなかった。また、第 1 次調査東区で検出した掘立柱東西塀 S A 060 (『概報 3』) の西延長部を確認しようとしたが、この部分には国営公園建設時に排水用のヒューム管が埋設されていて、遺構は完全に破壊されていた。

遺 物

大量の瓦のほか、土器 (須恵器・土師器)、金属製品、凝灰岩切石断片などが出土した。瓦類は、丸・平瓦、軒瓦、塼が出土。軒瓦は軒丸瓦 19 点と軒平瓦 7 点が出土した (Tab. 6)。軒丸瓦では 21 型式が 9 点 (A 7 点・B 2 点) と最も多い。軒平瓦 152 型式 A は、今回初めて出土した (Fig. 59)。瓦当面に正格子叩き目を押した軒平瓦である。桶巻き作りで、顎は段顎である。平瓦部凸面と顎面をヨコナデ調整するが、顎面には縄叩き目が残っており、成形時の叩き板と瓦当面の叩き板とが違っている。丸瓦は 1,298 点 (216.8 kg)・平瓦は 3,913 点 (705.4 kg) 出土した。他に、鷗尾片 3 点と熨斗瓦 1 点がある。

そのほか、鉄滓 (椀形滓) 1 点と用途不明の銅製品 1 点が出土した。

ま と め

狭い調査区ではあったが、奈良時代の坂田寺に関わる遺構を確認できた。坂田寺は傾斜地に立地するため、伽藍地の各所に堂塔をのせるためには、平坦面を造成する必要があった。今回、奈良時代の中核伽藍と思われる部分の北側を調査し、その斜面部に設けられた石垣 S X 120、S X 230 と S X 231 を検出した。これらの石垣は奈良時代の整地土の土留めの役割をもっていたものと推測される。S X 230 と S X 231 はともに裏込め土に瓦を含み、特に S X 120 と S X 230 の間には瓦が面をなして堆積していた。この状況は第 2 次調査南区でも、奈良時代の整地土の下で確認されており、今回の調査地の南側に 7 世紀代の瓦葺き建物が存在したことを示唆する。奈良時代以前の坂田寺伽藍の解明は、今後の大きな調査課題である。

Tab. 6 出土軒瓦点数表

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
1 D	1	104 A	1
6 B	2	122 A	1
7 A	1	123 A	3
8 A	3	124 A	1
11 A	1	152 A	1
21 A	7		
21 B	2		
31 A	2		
計	19		7
合 計	26 点		



Fig. 59 軒平瓦 152 型式 A (1 : 4)

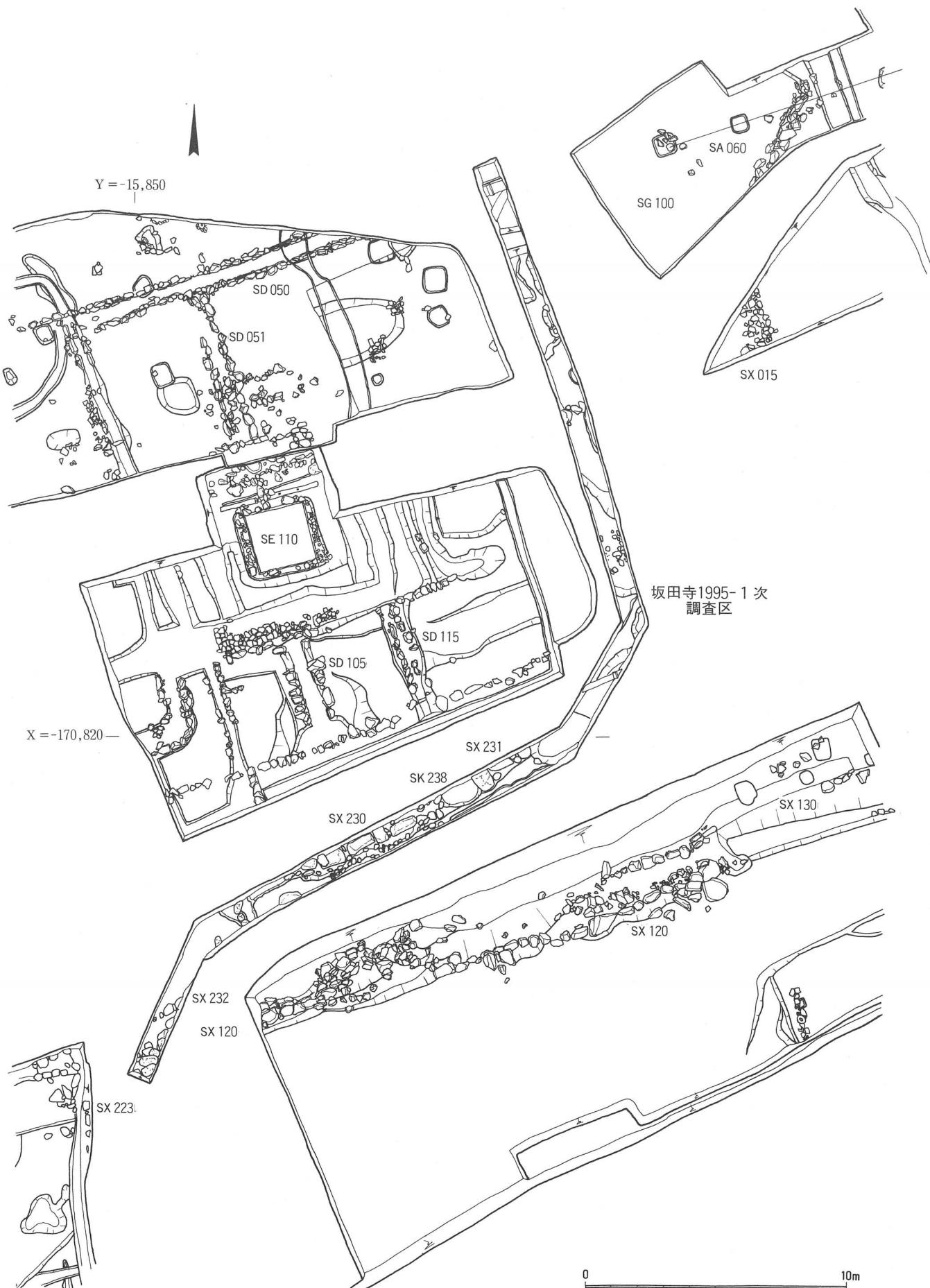


Fig.60 坂田寺1995-1次調査遺構図 (1 : 200)